

安定した座位保持獲得に向けて

『上田法と固有受容器性神経筋促通概念コラボレーション実施の効果』

医療法人 盡誠会 宮本病院

理学療法士 吉田 誠

Key word 上田法・固有受容器性神経筋促通概念(以下 PNF 概念)・コラボレーション

【はじめに】

端座位・車椅子座位保持することが困難な症例に上田法を実施したところ,30 分程度,端座位・車椅子座位保持が可能となったが,更に日常生活動作(以下 ADL)で実用的とするために PNF 概念をコラボレーションした.それにより座位保持時間が延長でき,デイルームでの食事等の ADL 改善することが出来たため,その方法を紹介する.なお本発表は当院倫理委員会にて承認を受け,本症例とご家族様に説明し写真の使用も同意を得た上で行っている.

【症例紹介・問題点】

80 歳代女性.平成 24 年脳梗塞,認知症発症し ADL 低下,介護困難になったため当院入院.平成 27 年に右脳梗塞再発した.家族 HOPE として車椅子での散歩が挙げられていたが,座位姿勢不良によりずり落ちの転落リスクが高く,近位監視レベル.主訴は「座っている時,後ろに引っ張られる感じがする」とのこと.治療前の端座位時,後ろに倒れているにも関わらず「真っ直ぐだろ?」と発言があった.このことから腹筋群(遠心性収縮)筋力低下,ボディイメージの欠如と考えた.また左上肢(MAS:2)・頸部・体幹伸展筋緊張亢進,頸部・体幹伸展・左上肢屈曲共同運動出現し,端座位・車椅子座位保持困難になった.下記評価は上田法の肩-骨盤法(以下 S-P 法),胸椎-頸部法(以下 T-N 法)実施後によるもので MMT(体幹屈曲)2+,座位保持時の恐怖心が聞かれた.これは体幹の不安定性によるものと仮説を立てた.

【治療プログラム】

上田法として①S-P 法②T-N 法③上肢法を用いた.(頸部・体幹・左上肢筋緊張軽減目的).PNF 概念として④上部体幹のパターン用いた.(1.PNF 基本手順の中の圧縮を用いることで体幹の筋収縮や安定性を促通し安定性獲得を目的 2.PNF テクニックである等張性運動の組み合わせを用いて体幹腹筋群の求心性収縮を促通.この際,手を組み右足趾に両上肢をリーチングにより左上肢屈曲共同運動抑制.上肢を巻き込み体幹腹筋群へ,イラディエーションを目的 3.体幹腹筋群の遠心性収縮促通を目的).これらの目的は体幹腹筋群の筋出力と後方重心の改善,制御された運動性の増大である.更に⑤端座位練習実施(PNF テクニックであるスタビライジング・リバーサルズを実施した.これは体幹への回旋を加えることで体幹の回旋筋群・腹筋群と伸展筋群の協調的な収縮を促通し座位保持の安定性向上の獲得が目的である).

【結果】

端座位・車椅子座位姿勢は,後方重心,麻痺側肩甲帯・骨盤帯後退,手・肘関節屈曲位が改善,左右対称,両足底接地の端座位姿勢となり車椅子座位も安定した座位姿勢となった.

※S-P 法,T-N 法,上肢法実施のみの座位保持時間は 30 分であった.上田法と PNF 概念コラボレーション後は,端座位姿勢の安定性向上,車椅子座位によりデイルームで食事・散歩可能となり,体幹不安定性による恐怖心もみられなくなった.

【考察】

今回,上田法では,頸部・体幹・左上肢筋緊張軽減して 30 分程度,端座位・車椅子座位保持が可能となった.佐藤らは座位保持には体幹の遠心性収縮が必要と報告している.そこで PNF 概念を用いて体幹腹筋群の遠心性収縮獲得できたことで,現在も 30 分以上安定した端座位・車椅子座位保持が改善したと考えた.運動機能を改善するうえで筋緊張を上田法で適正に戻し,PNF 概念を用い筋力促通を図り,相互の利点を組み合わせると,今まで座位保持困難であった本症例に対しても効果的かつ効率的に治療が行え,劇的に ADL 改善し般化出来たと考える.